航米日録　巻三

【パナマ港寄港からワシントン市滞留まで】

注意：現代語訳の作成に当たっては、以下の点について心した。

(1)「日本思想大系66　西洋見聞集」(岩波書店,1974年12月)記載の「航米日録」(沼田次郎氏(東大名誉教授)校正)をほぼそのままに現代語に変換するよう心掛けた。

(2)　玉虫自らが注意書きした箇所は(　)内に示した。

(3)　地名、呼名については、沼田次郎氏の校正註を基に現代語に変換した。沼田次郎氏の校正註は《　》内に記載した。

(4)　校正註について疑問がある点、或いは読者の利便を考えた註を筆者(菅原)の独断にて付加した。それを【　】内に朱記にて示した。

(5)　２月２日午後６時頃に、東経から西経へ日付変更線を通過したので、日にちを減ずる必要があるが、そのままになっているので文中の曜日が合わなくなっている。このため筆者(菅原)が日にちを修正した。尚、玉虫の日付を【　】内に緑記した。又、旧暦と新暦の対応は、筆者(菅原)が付加した。

旧暦万延元(1860)年閏3月05日(新暦4月25日)【閏3月06日】晴。

今日は御奉行を始め、全員が上陸し、直ぐに蒸気機関車に乗ってアスペンワル《アスピンウォール：Aspinwall。大西洋岸の港町、現在のコロン》へ行こうと午前８時頃、米国より迎船が来た。これは川を航行する蒸気船である。直ぐに乗り移り、半里【0.8km】程航行すると、ポーハタン号で祝砲を発し、且つ音楽を演奏した。この港に係留している米国船が、これに応えて答砲を発した。その場所から一里半程航行して岸に着いた。直ぐに蒸気機関車に乗って目的地に向い、パナマ市街には足を一歩も踏み入れずに、唯、黒人が左右に雑踏するのを見ただけであった。午後、この港を出航し、西に航行する。瞬く間に12～13里を航行し、サンパブロー《San Pablo》と言う処でしばし休憩する。この場所は、日本で言う「立場」《憩所または発着所の意。むかし街道で人夫が駕籠をとめて休む揚所を立場といった。》の様なもので、各自汽車を降りて昼食を摂る。山中の一軒家ではあるが二階建てで、長さ十間、横六間の大きさで、上にガラス窓が二つ有り、左右に入口があり、一階部分は三つの窓があり、左右と中央に三個入口が有る。皆綺麗で、レンガを用いて築造されている。その家の周囲に多くの草花を植えている。当時はホウセンカ、センニチソウの類が爛漫と咲いていた。その外、名前を知らないものが沢山あった。１時間程して、その場所を出発し、直ぐにアスペンワルに着いた。車窓からの風景は奇景であったが、汽車のスピードが速いため、

一つも確認することが出来なかった。唯、山中に所々小さな家が点在するのが見えた。どれも粗略なもので、日本の蝦夷地の家に似た様なものである。パナマよりアスペンワル迄、米国の里法で47里【75km】である。今朝、八ツ時一分《「五ツ時半」が正しく、午前９時》に蒸気機関車に乗り、十一時一分五リン《「九ツ時半」が正しく、午後１時》に到着。この間、三時零五厘であった。その内、一時はサンパブローで休憩しているので、二時零五厘(日本で言う「一時強」である)で47里【75km】を走行する。日本の19里余に相当する。その速いことは、実に驚くべきことである(大略を以下に記す)。午後２時頃、アスペンワルに到着し、直ぐに小船に乗り換え、米国から来た大鑑に乗り移る。船名はロノーク《Roanoke.1855年建造の米国海軍の汽走フリゲート艦》と言う。ポーハタン号に比べればやや大きいが、日本の官吏【正使、副使等の上級職・属官】を除いては、【我々の様な従者の】部屋は設置されず、水夫と同じく中層の左右席が無い所に各人が控えており、少しも休息することが出来ない。止むを得ずこのことを官吏に伝えたところ、ようやくブランケットと言う毛布を人数分渡された。帆布を幕として、各自の境界を決め、膝を入れられる程度の空間を確保した。しかし、日々の掃除や波頭が高いときは、砲窓より潮水が入り込み、荷物の移動に混雑が生じた。船の中層は湿気が多く、注意しないと病気になってしまう恐れがあるため、その苦労は一々説明するに及ばない。皆不平を言うのも止むを得ないことである。さて、ポーハタン号の人達と数十日同船して彼等と親密になったが、パナマ港でお互いに別れの挨拶をした。誰も皆、別れを惜しんで悲嘆の表情を隠さなかった。外国人と言ってもその情愛の厚いことは、心に感ずるべきものである。
○寒暖計華氏86度(30.0℃)

杷納麻(パナマ)

このパナマは北アメリカと南アメリカの結合する有名な喉の部分にあたる所である。独立したニューグラナダに属し、一国となっている。この辺りを総称して中央アメリカと言う。北緯９度から10度に至り、西経77度30分から81度に至る。海門は東南の方向に向いており、左右は平山でその間の距離は十里程である。遥か遠くに山が見える。緑樹が繁茂している。西南方向に小島が12～13点在している。馬の背の様に、或いは虎が臥せった様に、或いはくさび跡の様に、或いは伏せた盆の様にその景観は非常に珍しい。唯、惜しいのはこの港の水深は浅いので船舶が接岸することが出来ない。それ故、諸外国の船は岸から二里～三里程離れて碇を下ろしている。パナマからアスペンワルまで、僅かに47里(日本の19里余り)であるが、南アメリカのアンデス山脈の脈路で高低が一様でない。西洋人が協議してこの場所を租借し、山を削り谷を埋め、鉄道を敷設した。この地を五千

万ドルで借りたので、地代として年間六万ドルをイスパニア《スペイン》に返還している。旅客一人に付25ドル、荷物一斤に付20セントを徴収する。五十斤以上は賃金があるが、その下は賃金が無い。緊急のものは重量に関らずその賃金を定めている。

アスペンワル港の情報

アスペンワル港もニューグラナダに属し、山が連なり樹木が繁茂している。海門は西北の方向に面し、左右に岬が有る。その間の距離は僅かに2、3里であり、周囲が40里の小港である。この港は水深が浅く大きな船舶が接岸することは出来ず、大抵20～30町離れて碇を下ろしている。戸数の詳細は分からないが、凡そ500～600戸であろう。市街地の多くはホテルか酒場で、雑貨屋は至って少ない。これは東洋と西洋に通ずる船舶の停泊する場所のためである。近頃は繁盛して人口も増えているとの由。

風俗

風俗は、ハワイのサンドウィッチと同じく、男女共に肌の色は黒く、衣服は非常に粗略である。女性はフープスカートを用いず、僧衣の様な着物を着ている。自分達一行が蒸気機関車に乗車したとき、左右前後に数百人の客が来て混雑した。その中に色の白い人が居た。これは恐らくスペイン人であろう。土着人の性格は狡猾で、往々にして旅行客を侵奪している。このため、この港を通過する旅行客は細心の注意をすると言うことである。家の建築はレンガを積み、至って大きなものである。しかし、山間部では竹木で小屋を作り、日本の蝦夷地の小屋の様である。これは土着人の家なのであろう。パナマよりアスペンワル迄20里あるが、水田を見たことがない。家の周囲に牛馬を放牧し、バショウ・ヤシの類を植えている。獣肉や木の実を平生の食料としており、米を主食としていないことは、これからも分かることである。

時候

この場所は北緯9度前後に位置し、天候は非常に炎熱である。７～９月(日本の５月末から８月末頃まで)頃は、降雨が連日続いて止む時が無い。我々一行がこの場所に着いた時、米国暦で四月末(日本の３月)であったので、太陽は北緯11～12度の処なのでほぼ直下に当たる。そうであれば太陽直下から僅かに３～４度離れたところであるが、日中には俄か雨が降って炎熱が一掃される。夜は蛍が飛び交い、虫が処々で鳴いて、日本の秋の情景である。但し、夏至と冬至のときは少々涼気を催し、春分と秋分のときは非常な炎熱となる。それ故、一年の内に夏が二

回、冬が二回来る感じである。気候風土のための伝染病があると言っても、米国の地に比べれば、少しはましであろう。

草木

土地は肥沃で草木が繁茂し、果実が取れる。その外、トウモロコシ、木綿、ヤシ、染料の類があると言う話である。我々一行がこの場所に着いた時、果実が大抵熟していて土着人が船中に持って来た事がある。メロン(米国名)と言う物があり、その形はアケビに似て色が青く、皮を剥いて果肉を食する。味は甘く非常に美味しい。アレンズ(米国名)《Orange：オレンジ》と言う物があり、その形はダイダイの様で味は甘く、蜜柑に似ている。ポンムガレン《Pomegranate：ざくろ》と言う日本のざくろがある。又、ココナツと言ういわゆるヤシがある。又、ヘナナ《Banana：バナナ》と言う日本の芭蕉の実がある。又、バームナテ《Palm nut：シュロの実》という幹や葉がヤシの木のようで実は赤く、数顆が一房になっているものがある。皮を剥くと硬い実があって、指輪等に用いれば頗る美しいものである。又、ハイナープン《Pine apple：パイナップル》と言う、その形松の実の様で大きく、葉は万年青(おもと)に似て、頭に又葉が生えている。味は酸っぱく渋い。又、アイブリナ《Ivory nut：ぞうげやしの実》と言うその実は硬くて角の様なものがある。形は栗の実の様で大きいものである。米国人はこれらを用いて種々の細工品を作る。或る人の説に拠れば、アスペンワルの海岸の藻の実であるとのこと。そのほかにも色々あるが、短期間の滞在であったので、その名前を聞くことが出来なかった。

生物

この場所は山脈が重畳していて、密林の奥深さはどの位であるか分からない。それ故、虎、豹、豺、狼、熊、羆、猪、鹿の類が多く生息していると言う。又、豚、羊、牛、馬を常に牧畜し、それらが家の周囲に群れているのが見える。鳥については種々の珍しい鳥がいる。ツバメ、スズメ、カラス、トビの類は一切見ていない。

貨幣

貨幣はニューグラナダで鋳造しているものを使用しているが、外国の船舶が出入りしている所なので、諸国の貨幣が併用されている。

物価

この地に滞留していないので物価を調べることは出来なかった。唯、船中に持っ

て来た果実を買ったが、オレンジ10個で50セント、卵50個で1ドル(日本の方銀３枚に相当)である。お金の値打ちが低く、物価が高いのが分かる。

蒸気機関車

蒸気機関車は300馬力で、大きな車輪４輪は前方、小さな車輪４輪は後方にあり、蒸気機関をその上に設けている。蒸気管は後方から火を焚き、前方に煙突がある。管の左右に気筒(諸管へ蒸気を通貫する器械を言う)を設置し、それよりピストンを出して前後の車輪に接続し、蒸気を管中から左右の気管に通管してピストンを動かせば、大きな車輪４輪が回転し、小さな車輪４輪がそれに追随して回転する。第一車【いわゆる蒸気機関車であろう】上の蒸気管の右に日本の国旗、左にパナマの国旗を建て、中央に米国の国旗を建てている。その場所から少し後方に半鐘を設置している。機関車の進退の合図にそれを打つということである。又、少しばかり後に半鐘の様なものを設けて、蒸気を当てると猛烈な音が鳴る。これは線路の高低屈曲の場所で信号のように鳴らすためである。第二車【いわゆる石炭車であろう】は小さな車輪４輪で、上に薪水を貯蔵している。第三車以降は全て長さは八間【約15m】幅八尺【約2.5m】高さ六尺【約1.8m】の屋台の様な物を小さな車輪８輪の上に設置している。総計６輌が接続されている。その接続は、前車の後、後車の前、各車の中央から幅四寸【約12cm】長さ６～７寸【約20cm】厚さ１寸【約3cm】ほどのピストンを出して、各一寸五分【約5cm】ほどの穴を上下に開けて、その中を丸い栓棒で閉めておく。これは屈曲自在にするためである。又、左右両端を鋳鎖で繋ぎ、線路が屈曲している所ではその屈曲に従って鋳鎖が伸縮するため進退には影響しない。又、小さな車輪８輪を前後両端に分けて、その四輪は銕を用いて一車台に接続し、銕栓で屋台の下に結合している。これも線路の屈曲のためであろう。屋台は左右三尺【約90cm】に分けて椅子を設置し、左右各14個あり、側にガラス窓が総計28個ある。中二尺【約60cm】は通路である。便所は後隅に設けられている。最後の車輌に上官の便所があり、この順に構成しており、最下官は最前の車輌に乗る。このため、上官が指令するときは綱を引く。綱は全ての車輌を貫通しており最前車輌に通じている。最前で応答すれば、直ぐに鐘を鳴らす。これによって機関手は進退をする。線路は長さ一丈【約3m】程の木材を横に土中に埋め、その上に長さ一丈六尺【約4.8m】程の鋳鉄製の の様な形の物を車軸の広狭に従って凡そ五尺【約1.5m】の幅で左右両側に配し、下の木材に釘打ちして接触面を平らかにし、車輌の進行に遅滞無い様にしている。又、半里【約800m】毎に必ず標柱を立てている。これは里数を知るためである。線路には高低あるが、【傾斜が】４～５度を過ぎる事は無い。線路の屈曲は一様でないが、円周方向に

形作る。又、パナマからアスペンワル迄の間に、予備の水を５、６箇所に設け、その水は周囲四、五尺、高さ三尺程の鋳桶に入れ、地上六尺の所に置き、銅管を桶底より出し、直ぐに蒸気機関車の水桶に入れる。又、薪水や銕栓を処々に蓄えている。これらは破損したときの備えである。且つ線路は大抵単線であるが、パナマやアスペンワルでは五線に別れている。その側に伝信機の銅線がある。二間程の木材を一町の間隔で立て、その上に銕釘を打ってそれに青色のガラスを設け、銅線をその中を貫通させ、これにて予め往来の時を知らせることができる。このため、二つの車輛が遭遇する危険性は無いと言われている。機関車のスピードは速く、左右の樹木が植わっているがそれを識別することは出来ない。機関車の発する音は非常にうるさく、怒雷の様である。二人が相対しても相手の言うことが聞き取れない。走行中は車体が平らで、安然として座っている様であり、文字を書き写すことも出来る。時折ガラス窓を開けると涼風が前面から入って来、どんな炎暑も忘れてしまう。その非常に珍しく且つ精密な機構に驚き入るばかりである。

ロノーク船の大略

ロノーク船、長さは五十二間余【約94m】、幅八間半余【約15m】、吃水深さ四間余【約7m】、階数全五層。初層は雑庫、二層の船尾は左右に雑庫、二層の船首は雑庫と士官室。三層の船尾は左右士官室、中央に食堂が有ってテーブルが設けられている。このため隔壁が有り、その隔壁を越えて又左右に士官室が有る。中央の処々に食堂を作り、船首の左右は棚になっている。中央は水夫の食堂になっている。船首端は医官の部屋で、隔壁で一人部屋になっている。四層の船尾は船長・司令官の部屋、左右に士官室が有る。この部屋を修理し、日本官吏の部屋とする。御奉行は船長の前の部屋で、両人は一部屋に居住する。その外、部屋の広狭に従って、一人或いは二人が居住する。従臣の部屋は特に作らず、士官部屋の隣である。左右全て帆布で仕切りの幕とし、中にはブランケット或いは御座を敷き、順次隔壁とする。但し、御奉行・御目付の用人・給人は三層の士官部屋の一つを借りて同居する。ポーハタン号に比べると(従臣の部屋が)狭くて雑な作りである。四層の船首は厨房で左右にトイレが有る。中央二箇所にスピール(日本で言うカグラサンというもの)《オランダ語Spil：ウィンチ》を設置して、碇の上下をこの場所で行っている。その外、人数及び職責を問うのも同様である。五層には帆柱が三本あり、全て四層帆である。船具は大抵四層か三層に設置されている。砲窓は四層と五層に有り、四層には左右各18門総計36窓、五層には左右各16門総計32窓が有る。それ故、砲数はカノン砲の総計40門、ホーウィッセル砲《オランダ語houwitzer：榴弾砲》二門を五層の前後に備えている。蒸気機関は船の中央に

在り、暗車(俗にヒネリ仕掛と言い、外より見ることが出来ないので、このため暗車と言う。《スクリューの事》)である。器械は船の中央に在り、半分は水中に在り、車【スクリュー】は船尾端に在って外より見る事が出来ない。その珍しく精密なことをことごとく記述することは出来ない。船中の人数は580人、日本人一行76人を入れると総計656人である。《使節団の人数は七十七人であったが、賄方の下男一名(半次郎)が病気のためサンフランシスコで入院、咸臨丸で帰国させることに決定し、一行は七十六人となっていた。》　船中の美しさは、ポーハタン号よりも凄く、上層から下層に至るまで全て美しい。この船は1855年製造で、諸器械が新しく且つ美しく、劣化・破損はしていない。船内の規範についてはポーハタン号とほぼ同じである。唯、碇の上下、帆綱を引くときは、二人が笛を吹いて指令を出す。音楽は鉦・大鼓を混ぜて演奏する。その他はポーハタン号と同じである。

旧暦万延元(1860)年閏3月06日(新暦4月26日)　【閏3月07日】朝、曇小雨、午後晴、東北の風。

午前８時頃碇を揚げ、始め北の方角に航行し、一里程して東北の方角に航行する。逆風なので帆を揚げずに蒸気機関のみにて進む。三十里程してホールトベロ《Portobelo：アスペンワル東方約35km付近にある港町》と言う処に着いた。碇を下ろし、飲み水を補給する。

○寒暖計華氏85度(29.4℃)

以下は閏三月七日【玉虫日付】に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)

『ロノーク号は、南アメリカのアスペンワル港から来たもので、船中で自分【玉虫】がたまたま日記を付けようと筆を取った時、米国人が珍しいと思ったのか、士官二人が帽子を脱いで、何か書いてくれと手を合わせて丁寧に頼んできた。このため、帽子に一つは「天下英雄有幾人」【天下英雄幾人か有る】、一つは「一王千古是神州」の一句を書いて遣った。彼等は大いに喜んで、直ぐに持ち帰った。しかしながら、少し経って官吏某から自分が呼び出された。何事かと思ってそこに行ったところ、「一王千古ノ句ヲ書セシヤ」と問いただされた。自分はその事情を詳細に説明したが、その後にその事が御奉行の耳に達したと見え、用役から「米国は共和政治の国なので、一王千古ノ句を書き与えたのは、米国の【政治】理念に反して大患が生じる端緒となるだろう。且つ、帽子は極めて貴重なもので、叨(みだ)りに書するは失礼である。このために万一事が生ずれば、御奉行の面目を潰すことになる。今後決して筆を取るな」と厳重に注意され、証状【誓約書】一通を取られた。自分が思うに、この事を書したと言っても大患の端緒とはなら

ないだろう。且つ日本の事を書して、鄙下【ひげ：卑しめる事】しては却って上様に恐れ多い事である。たとえ米国が強国と言って、何事も米国の事を尊崇すれば、益々跋扈《ばっこ：のさばりはびこる》して日本を蔑視することになるだろう。当今、既にその幾兆《きちょう：きざし》が現れている。そうであるのに、この様なことでは、終いには日本の醜恥を晒すのみならず、後患の端緒が現れる。何となれば、日本人一行は全員米国を尊崇し、少しもその意に逆らわず、たとえ日本の醜恥【ここでは条約締結により日本が不利になることを意味しているのではないか】になろうとも、安穏として帰国すれば本望であると考え、万事米国に諂諛【てんゆ：おもねりへつらうこと】することは、見るに忍びがたい事である。自分【玉虫】は一書生で事情【条約締結内容についての事情か】に迂闊であるけれども、是のために心ならずも袖を濡らした次第である。【条約締結内容が将来の日本にとって本当に妥当なものなのか自分は検討する立場に無く、且つ真剣に検討する人が一行に居ないので、将来が心配で思わず落涙したということか】』

旧暦万延元(1860)年閏3月07日(新暦4月27日)　【閏3月08日】晴、北東の風。

滞留【パナマ】。午前10時頃四層の所で御奉行その外の諸官が沐浴する(船尾に大きなたらいを設け、足を洗うのみ。)　従臣は順次岸谷に行き、その水で沐浴する。自分は第二船に乗って行ったが、谷の水が枯渇して沐浴が出来なかった。このため、溜り水を汲み手足を洗った。或る者は海水を汲んで沐浴したりした。午後、船上で小砲及び槍剣の訓練があった。その訓練方法はポーハタン号と違いは無い。唯、どちらも熟達しているので、訓練を見るのは楽しみである。午後２時頃碇を揚げた。始め、西南の方向に向かい、海門を出ると方向を転じて東北の方向に向かう。海門の右手に奇妙な形の小島が５～６見え、非常に絶景である。その左右には山が高く連なって聳え立ち、樹木は鬱蒼と繁茂しその奥深さは計り知れない。１～２里【1.6-3.2km】程航行すると陽は傾き、山色はぼんやりとして分からない。夜になって涼風が吹き、少し炎熱が吹き払われた。午後８時頃、音楽がなった。夜中に音楽がなるのはこの船のみである。

ホールトベラ情勢

ホールトベラ港、ニューグラナダの一港町で、北緯09度24分29秒、西経79度43分26秒に位置する。海門は西南に面し、幅はわずかに22～23町【2.2-2.3km】、周囲は一里【1.6km】余りで、左右は皆山で樹木が鬱蒼と繁茂している。東岸には人家50～60軒程建っているのが見える。昔、スペインのコロンブスが航海したとき、初めてこの地を発見・開拓し、最古の港として市街を構築したが、パナマへの車道が開通すると、パナマが日々に繁栄して行き、ホールトベラは衰微して、現在

では寂しい限りである。唯山中なので谷水多く湧き出ている。且つ港の水深は深いので船中に水を汲み入れるのが非常に便利である。それ故、アスペンワルで碇を揚げ、この場所で水を補給した。この水の対価は１カルロン（１升８合余り）《ガロン：3.785L》で１セントである。東西の岸の間は12～13丁で、東岸に人家50～60軒見える。谷水は西岸にある。女が一人竹の様なもので非常に粗末な小屋を作り、その場所に居る。何故その様にしているのか誰でも疑わざるを得ない。或る人が言うには、常時は東岸に居て、事件があるとこの所に来るとの事。この所は山が険しくその深さは計り知れない。そのため、猛獣・毒虫が多く、人を殺すことがある。或る人が言うには、この小屋にてイコマナ（米国名）《イグワナ：iguana》と言う物を見るとのことである。その形は半身蛇の様で、腰より以下はサメの様に灰色である。頭より尾まで凡そ２尺２寸【65cm】、米国人達は小砲でこれを仕留めて食する。その外、奇木・異草が多いと言われるが短期間の滞在なのでそれらを見ることは出来なかった。
○寒暖計華氏84度（28.9℃）

旧暦万延元（1860）年閏3月08日（新暦4月28日）【閏3月09日】朝曇、午前10時頃晴、北東の風。

東北の方角に航行。逆風なので帆を揚げることが出来ず、蒸気機関で航行する。午後東北東の風に変わり、二三帆を揚げたが、波頭が烈しく船が揺動して道具・家具類が時たま転倒した。今日は船中の大酒漉【水樽・酒樽の清掃と思われる】で、上層・中層残らず水を注ぐため部屋に居ることが出来ず、器物を置くことも出来ない。このため各人場所を探して荷物を置く。その間上層に移動して４時間ほど時間を過ごした。甲板には座る場所が無く、或る者は立ち、或る者は腰を掛けていたが、上層の船尾より十間【18m】ばかり隔てて床机【折畳みテーブル】二個づつ左右に並べ、その上に赤色の花形（米利堅（メリケン）の紋）の大きな服紗を敷き、船首より板へ乗せ、藍色・花形の服紗で覆ったものを持出してその床机の上に乗せた。その理由を尋ねたところ、昨夜水夫二人が病死したため、今日水葬するとの事である。１時間程過ぎ、船長・士官６～７人側に整列し、神父が一人死体の前に立ち、各人は脱帽している。１時間程説教が続き、その後葬送の音楽を演奏して死体をウィンチで挙げて船の中央から水中へ投げ入れた。一人は右に、一人は左に。その死体は全身を帆布で包み、足には10貫目【38kg】ほどの錘を縛り付けて水面に浮かない様にしている。葬式は極めて丁重で、水夫の死と言えども船長は悲嘆の色を表わしている。午後酒漉が終わり、各人が部屋を入る。その間、道具・家具類の移動に混雑する。酒漉の時は何時もこの様な状況である。従臣の者に取っては非常に煩雑なことである。午後２時頃波頭が益々激しくなり、

中層の砲門に海水が漲(みなぎ)り入って来た。夕方、北に向けて航行する。風波が烈しく船は盛んに揺動する。道具・家具類が転倒し、時たま破損する。夜半になって少し穏やかとなる。
○寒暖計華氏84度(28.9℃) ○昨日午後３時より今日正午迄91里○北緯10度58分○西経78度59分
以下は閏三月九日【玉虫日付】に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)
『昨夜水夫二人が病死し、今日水葬の儀式を行った。船長等がこの式に参列し、悲嘆の表情を顕わさない者は一人も居ず、その応対振りは我が子に接する様であった。これに拠って、米国の国力益々隆盛なことを知った。何となれば、上下相親しむ事この様であれば、人々は感化せざるを得なくなる。かつて聞くところによれば、合衆国開闢以来、反逆を行う者が居ないと。実にその様であろう。【一方、】日本の賤官が死亡した場合には犬馬が死亡した場合の様に取り扱い、その葬式の場に【上司として】参列して弔う者が居るだろうか。【日本の場合】上下の情は薄く、それがために、米国と対比した場合、恥ずかしい限りである。今、米国人の行動を見て、【日本人一行の中で】心に恥じない者が誰か居ようか。』

旧暦万延元(1860)年閏3月09日(新暦4月29日) 【閏3月10日】晴、午後俄か雨、北東の風。

今日は北西に向って航行する(北より西に二分)。横帆を揚げたが順風ではないので、船のスピードは速くは無い。この近辺は日中だけ炎熱が烈しく、夜になると涼風が吹いて涼しく感じる。波頭は静かで船は揺動しない。
○寒暖計華氏83度(28.3℃) ○正午迄119里○北緯13度04分○西経79度32分

旧暦万延元(1860)年閏3月10日(新暦4月30日) 【閏3月11日】晴俄か雨、午後２時頃晴、北東の風。

西北に向って航行する。順風ではないが、横帆を揚げて航行する。波頭が穏やかな性のためか、船のスピードは昨日の比ではない。午後に奇妙な形の鳥を見る。その形、羽翼は黒と緑青の混ざりで、背中は全て緑青である。腹は朱色、首は緑青で長い毛がある。くちばしは黄色で短く、尾は下毛が白く中毛は黒くて短い。上毛の長さは３尺【0.9m】で、半分は緑青、半分は紺青色であり、孔雀の尾に似ている。全身の長さは僅かに５～６寸【約17cm】で、名前をトロケンレスフレシト《校正者も分からず》と言う。他に形が鶯に似て、色が紺青で羽翼の間が黄色交じり、長さが１寸５分【4.5cm】位の鳥を見る。その名前を聞かなかった。又、別の鳥で、名前をヒハラケー《Parakeetであろうか。いんこ》と言う、羽翼

は蘭黄色で腹が青黄色の鳥がいる。くちばしについては、上くちばしが曲がって下くちばしの方に廻り、色白で薄赤である。形は鳩の大きなもので、よく人の言葉を真似する。何れも南アメリカの原産と言う。夕方から涼風が吹き、単衣の着物では少し涼しいくらいである。
○寒暖計華氏82度(27.8℃) ○正午迄137里○北緯15度44分○西経80度10分

旧暦万延元(1860)年閏3月11日(新暦5月01日) 【閏3月12日】晴、北東の風。

北西に向って航行する。横帆を揚げて航行する。波頭は静かで船は揺動しない。夜中は涼風が吹き、布団を用いないと寒くて眠れないほどであった。自分はブランケット一枚で寝たが、寒さが身に染みて目を覚ましてしまった。
○寒暖計華氏82度半(28.1℃) ○正午迄183里○北緯18度24分○西経82度34分

旧暦万延元(1860)年閏3月12日(新暦5月02日) 【閏3月13日】晴、北東の風。

西北に向って航行する。横帆を揚げて航行する。正午頃北に向う。【逆風のため】帆を揚げることが出来ず、蒸気機関にて航行する。午後２時頃、右側５～６里離れた所に大きな島を見る。これはキューバ島である。思うにこの島は西インド諸島中最大の島で、スペインの所領である。北緯19度50分から23度09分まで、西経74度08分から84度58分に至たっている。日本で言う【長さ】395里32町【1581km】、幅は日本の9里32町から52里11町【37～208km】に及ぶものである。人口は131万5799人と言う事である。現在、貿易が盛んに行われ、特にタバコが特産品であるとの事。或る説によると、この島を米国がスペインから買い取ろうと相談したが、スペインが拒否したとの事である。この島は土地が肥沃で物産が豊富に取れるからだろうとの由。今回はこの島を遠くに見るだけで通り過ぎるので、その形勢・状況を詳細に探査することが出来ないのが残念である。午後２時頃、水夫が上層で海から魚を一匹釣り上げた。紺色の背びれが頭から尻尾の辺りまであり、首は俗に言うアマ鯛と言う物に似ていて、眼下から腹の部分まで黄色である。膚は全て紺と黒の斑である。名はトルフヒン《Dolphin：イルカ》と言う。夕方、ギューバ島の僅か１～２里【1.6～3.2km】の所を航行する。その場所は平坦で樹木が繁茂し、海岸に灯台を設置しており、その灯台が夕日に映えて光り輝いている。名はケープサンエントータ《Cape San Antonio》と言う。夜は冷気を感じ、単衣のみでは居られない。
○寒暖計華氏80度(26.7℃) ○正午迄173里○北緯21度17分○西経84度29分

旧暦万延元(1860)年閏3月13日(新暦5月03日) 【閏3月14日】晴、北東の風。

今朝方、東北方面へ向って航行する。横帆を揚げる。波頭は穏やかで船は揺

動しない。今朝、キューバ島は遠く16～17里【26km】程離れてしまい遥かに見えるだけである。米国人と談話して二つの事項を得た。一つは、米国では男子が21歳、女子18歳に達しないと結婚が許されないことである。飲酒も同様である。男子が30歳、女子が20歳になって結婚すれば、長い年月に亘り、自然に濃厚な男女の悪い営みが行われるのみならず、人種の繁育を損なうことになる【意味不明】。他の一つは、気球である。これは非常に奇妙であるが、実用に供するものではなく、一時的な遊興のものである。その理由は、風の吹くに任せて飛行するため、時たま意図せぬ方向に行ってしまい、東へ行きたいのに西に行ってしまうということである。その害は計り知れない。そのため今、この風船に乗っている者を非難して痴愚の至りであると言っているとの由。
○寒暖計華氏76度(24.4℃) ○正午迄109里○北緯22度57分○西経83度44分

旧暦万延元(1860)年閏3月14日(新暦5月04日) 【閏3月15日】晴、東の風。

東北方面へ向って航行する。波頭が穏やかであることは昨日と同じである。正午に米国船一隻がローノツケ【ロノーク船のこと】の右を通過し、互いに船号を唱えて各々敬礼をして去る。北の方向に、米国領内のフロリダ(花地)の近島セイベロ《フロリダ南端のCape Sableのこと》と言う処の灯台を遥か遠くに見る。その高さは154フィートとの事。そこを過ぎ、２時間程でフロリダ岬を通過する。遥か遠くで見ると小島の様である。午後２時頃大訓練がある。緩急を付けて各自が自分の持ち場へ装備品を携えて、暫らくして終わる。夕方にはフロリダ岬を遥かに遠く見て離れてしまった。夜も波頭が穏やかなのは同じである。炎熱が少し厳しく、夜中と言っても涼しさを感じない。
○寒暖計華氏79度(26.1℃) ○正午迄170里○北緯24度37分○西経80度48分

旧暦万延元(1860)年閏3月15日(新暦5月05日) 【閏3月16日】晴、北東の風、夜西風。

今朝、急に北方に向って航行する。波頭が穏やかであることは昨日と同じである。唯、逆風なので帆を揚げることは出来ず、従って船のスピードは速くはない。２時間程で僅かに５～６里【約9km】の航行である。午前８時頃、船中の大酒樽の掃除で雑踏となる。ここ二三日、諸外国の船が左右に通過し、その数は多すぎて分からない。何処の国の船か分からないが、日本近海では一隻も見なかった時と比べれば、自然に孤独な船旅での自らを奮い立たせる助けとなる。夜半になって西風に変わり、横帆を揚げて航行する。風が強く船のスピードは前日と比べ物にならない程早い。直ぐに蒸気機関を止めて、風のみで航行する。この船は本来、スクリュウで航行する様になっていて、順風のときはこれを使用しないので、

却って速い場合があると言う。ポーハタン号の場合は、左右の外輪が風の抵抗になるため、順風と言っても常に蒸気機関を止めることは出来ない。しかし、ポーハタン号は速力の速い船であり、風の順逆に関わらず速やかに航行することは、ロノーク船の比ではない。
○寒暖計華氏79度(26.1℃) ○正午迄182里○北緯27度24分○西経79度41分

旧暦万延元(1860)年閏3月16日(新暦5月06日) 【閏3月17日】晴、西風。

少し方向を転じて東北(東方二分程)の方向に航行する。順風で数帆を揚げる。船のスピードは頗る速かったが、午後にになって風が止み、スピードが落ちた。波頭が穏やかで、座っている様であった。蒸気機関に多少の破損があり、修復の間蒸気を止め、帆のみにて航行する。この辺りの緯度では空気が冷たいだろうと思ったが、非常な炎熱で、夜半になっても尚涼しくならず、単衣の着物で過ごす。
○寒暖計華氏78度(25.6℃) ○正午迄223里○北緯31度05分○西経79度04分

旧暦万延元(1860)年閏3月17日(新暦5月07日) 【閏3月18日】晴、東北の風、午後２時頃東南の風。

東北の方向に航行する。逆風なので帆は揚げられず、蒸気機関のみにて航行する。午前10時頃、ピストール《Pistol：ピストル》の訓練がある。乗船後初めてこの訓練を見る。その操作の非常に簡単で便利なことを知る。午後２時頃、東南の風に変わり、帆を揚げた。さて、船中で飼っていた奇獣がいる。自分は今日初めてそれを見る。一つはモンケ《Monkey：サル》と言う物であり、全く日本の猿と同じである。唯、尻尾の長さが大抵２尺５～６寸【約77cm】で、樹木を上下することが得意で、長い尻尾を枝葉に絡ませて、左右に体を揺さぶって行く。その尻尾の自由な動きはまるで手足の様である。もう一つは、米国名でラクン《Racoon：あらいぐま》と言う、形が狸で、頬が狭く尻尾は虎の毛の様で、その長さが２尺、全身の長さが1尺６～７寸【約50cm】、色は柿色である。どちらも南アメリカの産物と言うことである。
○寒暖計華氏82度(25.6℃) ○正午迄146里○北緯33度38分○西経76度42分

旧暦万延元(1860)年閏3月18日(新暦5月08日) 【閏3月19日】朝晴、午後雲霧、北の風。

東北(東方一分程)の方向に航行する。逆風なので帆は揚げられない。午後雲霧が深くて近くが分からず、海上は暗夜の様である。このため、２時間毎に半鐘に似た物に蒸気を吹き掛けて猛烈な笛声を出し、夜になると空砲を発して合図を出す。これは船舶が接触して互いに破損することを避けるためである。昨日は殊

の外炎熱であったため、単衣の着物で過ごしたが、それでも尚汗が出た。処が今日になると忽ち寒くなり、綿入れの着物二枚を着ることとなった。気候が不順で皆困惑する。夜になってもまだ雲霧が深い。
○寒暖計華氏67度(25.6℃) ○正午迄173里○北緯36度34分○西経74度30分

旧暦万延元(1860)年閏3月19日(新暦5月09日) 【閏3月20日】雲霧、東の風。

東北(東方一分程)の方向に航行する。横帆を揚げる。船のスピードは頗る速い。午後、船の左側遥か遠くに灯台が見える。ニーヨルク【New York:以下「ニューヨーク」と記載】近島、バネトケット《Barnegat:ニュー・ジャージー州 バーニガット》と言う所である。この近辺は都会に近く、船舶の往来は頻繁である。午後2時頃、水先案内人がスクネール船に乗って遣って来た。午後4時頃、船の左側に都市が連連と見える。これはニューヨーク近地と言う。雲霧が漂い、その形勢がはっきりとは分からない。又、灯台が見える。スーチョイテート《校正者わからず》と言う所である。夕方、急に西に方向を変えて航行し、1時間程でサンテホック《Sandy Hook:サンディーフック》という所に来て碇を下ろす。この場所は、ニューヨークから僅かに20里(日本の10里弱)程離れた所であると言う。海門は東南に面し、左右皆山である。東北にロンクアイラント(島名。長さ96里)《Long Island:ロングアイランド》があり、すこぶる良い大湾である。唯、水深が浅く大きな船舶が接岸することは出来ない。このため、岸から1～2里の所に碇を下ろした。今晩ニューヨーク港に行こうとしたが、急に首都の華盛頓(ワシントン:以下「ワシントン市」と記載)に先ず行くべきであるとの米国政府からの進言があった。ワシントン市はこの場所から150里程離れた場所で、既に通り過ぎた所である。今その場所に行くのは、二度の手間になる。このため、評議したが中々決まらず、暫らく此処に碇を下ろす。士官と水夫は大いに不満で、自分達に対して「ワシントンノーグート」と言う。即ち良くないと言うことである。自分もニューヨークに行く積りであったのが、急に変更になってワシントン市に行くことになり、予定の予備日が無くなり、水夫の不平も尤もなことである。午後8時頃太鼓を打ち鳴らし且つ笛を吹いて、空砲一発を発して終わる。これは停泊時の夜の儀式である。
○寒暖計華氏61度(16.1℃) ○正午迄183里○北緯39度21分○西経74度11分○ここからニューヨークまで78里、サンテホック港北緯40度27分07秒、西経73度58分08秒
以下は閏三月廿日【玉虫日付】に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)
『今日になって、米国ニューヨーク港に近づいたが、米国政府から急に先ずワシ

ントン市に行くべきであると注進があった。ここで暫らく船をサンテホック（ニューヨークから僅か四・五里の所）と言う所に停泊させ、評議した。その時に、他からの情報として、今回日本使節の饗応として３万ドルを政府から輸送したとの事。これは米国の戦術かどうかは知らないが、３万ドルとはどの様な大饗応なのか。日本では、外国使節の饗応は多費と言っても、一回で一万金にもならないだろう。今、この事を聞き、一行全員は驚いた。』

旧暦万延元（1860）年閏3月20日（新暦5月10日）【閏3月21日】雨、東の風。

滞船【ニューヨーク近郊】。午前６時頃、始めに空砲一発が鳴る。その後太鼓或いは笛を吹く、これは停泊期間の朝の儀式である。午後４時頃小型の蒸気船が一隻来る。これはニューヨーク砲台奉行である。今日、日本使節団が携えて来た砲は、米国の新聞紙でその名を見聞きして知っていたため、一見の価値があると思い【ニューヨーク砲台奉行が駆け付けて】来たとの事。米国人の仕事に対して熱心なことはこのことを以て推し量ることが出来る。今日になっても評議は決着しない。船中誰一人としてワシントン市に行きたいと言う人は居ない。そのため、この様な状態であると言う。この場所は大変寒冷で、日中でも綿入れの着物を二枚重ねて着ている。時候が悪く連日はっきりしない天気で、船中は鬱々としている。日本人一行は速やかに上陸したいと思っているが、全てのスケジュールを米国人に委ねているため、自分達の意のままには行かない。このため、不平を言うのみである。この場所で日本の三月三日の事項を知る（新聞紙の記事にて知る）《米国飛脚船により、駐日米国公使のハリスが病死した事を知る。【三月三日は桜田門外の変で、大老井伊直弼が暗殺された。それを使節団一行は新聞で知ったのだろうか。校正者沼田次郎氏はそのことに言及せず。】》

○寒暖計華氏54度（12.2℃）

旧暦万延元（1860）年閏3月21日（新暦5月11日）【閏3月22日】晴、東の風。

今日初めてワシントン市行きに決定した。午前10時頃碇を揚げる。最初は東の方向に向かい、サンテホックを過ぎ午後４時頃大洋へ出て辺り一面に山を見ることは無かった。夜、寒冷が身に染みる。

○寒暖計華氏55度（12.8℃）

旧暦万延元（1860）年閏3月22日（新暦5月12日）【閏3月23日】雨、午後2時頃晴、東の風。

今日は西南に向って航行する。船のスピードは頗る速いが波頭がやや高く、船が揺動する。午前８時頃、砲門から雨水が入って来て、自分達の部屋は膝を入

れる隙間も無くなってしまった。午後２時頃雨が止み、部屋へ入ったが湿気が抜けず安心して住むことが出来ない。午後２時頃水夫が一人病死したので、船上にて葬式を行った。その様式は以前と同じである。午後４時頃、左舷に米国の蒸気船が一隻見える。互いに船号を唱えるが、向こうの船から一砲を発してきた。こちらのロノーク号からは祝砲ではなく祝声を発しただけである。午後４時過ぎに右舷の方角に街が連連と見える。地名をポインコンポーケ《Point Comfort：チェサピーク湾内の街》と言うとのこと。この場所から西に方向を転じて航行する。夕方、ハムトロケツ《Hampton Roads：ハンプトンローズ》【後述ハムーロークと同じ】と言う場所に着いて碇を下ろす。始め流星花火が打ち上げられその後音楽を演奏する。陽は既に傾いており、その地の景色を詳しく見ることは出来ない。灯火が左右に点々と見える。
○寒暖計華氏59度（15.0℃）○正午迄188里○北緯37度27分○西経74度41分

旧暦万延元（1860）年閏3月23日（新暦5月13日）【閏3月24日】晴、東北の風。

正午、ワシントン市より小船が一隻来て、これからチェスピーキ《Chesapeake：チェサピーク》と言う河を遡る。この河は水深が浅いため大船が通行することが出来ず、そのため河川用の小さなこの船で迎えに来たのである。艤装は美しく、名前をフェトルヒヤ《Philadelphia：【以下「フィラデルフィア」と記す】》と言う（大略を下記に記す）。午後２時頃、御奉行等一行全員が船に乗ったとき、ロノーク号から祝砲と音楽が演奏された。フィラデルフィア号でも音楽が演奏された。その乗務員は20人程で、全員赤い羅紗を着て羽毛の飾りの有る帽子を被って正装していた。それから１時間程音楽を演奏して碇を下ろした。ロノーク号では水夫がマストに登り祝声を発したので、その場が大いに盛り上がった。ここから半里【0.8km】程航行し、ハムトローツ岬の内、ウイチェニヤ《Virginiaのことか》と言う所に上陸した。ここは数多くの河川が海に注ぐ所であり、砲台を備えて厳重に警備している（大略を下記に記す）　暫らく見るのみにして又乗船し、西北に向って航行する。１時間程でチェサピーク川に着く。夕方なので景色がはっきりとは分からない。夜半にホーメキ《Potomac：以下「ポトマック」と記す》川に入る。即ち、ワシントン市へ通ずる川である。夜中なので辺りが暗く形勢を見極められない。

旧暦万延元（1860）年閏3月24日（新暦5月14日）【閏3月25日】晴、東の風。

朝、ポトマック川の西岸「エベンスホート」《校正者分からず【エバンスポートのことではないか。ここに砲台が設置されており、此処で1862年1月1日に南北戦争の「エバンスポート砲台の戦い」が行われた。現在のTown of Quantico】》と言う処で暫らく碇

を下ろす。人家数10、左右皆広葉樹が繁茂している。ポトマック川に入ってから此処まで米国の里程で六七十里【約104km】と言う事である。川幅の広い所では10里、狭い所では2～3里である。水の色は赤い。ここから上流に3里程行くと川の中央に島が有り、人家が２軒ほど見える。岸から12～13町の所は地面が低く、遠見すると水面と同レベルであり、そこに小船が10隻ほど停泊していた。これは通舟のためであるとの事。更に１～２里程航行すると西岸の樹木中に白亜の巨大な家が見える。これはワシントン墓所《ジョージワシントンの墓所》で、地名をライマンウツ《校正者分からず【南北戦争時の南軍リー将軍が住んでいた場所なのでリーマウンツと呼ばれていたか?】》と言う閑静な場所である。又2～3里航行すると東岸に砲台がある。砲門は50程、小さいけれどもその管理運営はウエチシニア【前述ウイチェニヤに同じ】と同じである。又又2～3里航行すると西岸に繁華な街が見える。地名をアレキサンテル《Alexandria：アレキサンドリア》と言う。これはワシントン市の良港である。道路は縦横に走り、美しい家屋が軒を連ね、人口は9千人との事である。川岸の数箇所に桟橋が有り、停泊や運搬に供している。この場所を通過したとき、船中で音楽が演奏された。街の紳士淑女数百人が雑踏して桟橋に来ていた。或る人は帽子を振り、或る人は白い手袋を振って礼をする。他に小船に乗って見物に来る人達が居て、各人声を発して礼をする。その鄭重さは驚くべきものである。そこから2～3里航行するとワシントン市に着く。上陸して1里の所のホテル【ウィラードホテル。現在のウィラード・インターコンチネンタル・ワシントン】(大略を下記に記す【巻四、4月19日に記述有り】)に投宿する。時刻は午後２時頃で、自分は１時間程遅れて上陸した。岸から車馬に乗ったが左右前後、男女で混雑する。自分を見ようと車馬或いは歩行で来、各人帽子を振って礼をする。甚だしいのは、自分等の車馬に接して握手しようとする者が居り、非常に迷惑である。御奉行が上陸した際は、始め船上で音楽を演奏し、陸上では小砲隊が警備に当たった。船が着岸して一町【100m】程行き、そこで各人車馬に乗る。米国の警備は、前には士官が数人、その次に赤い羅紗を着た者数十人が音楽を演奏する。その後に小砲隊が赤青白の色に分かれて左右一行に隊列を組んでいる。最後部は小砲隊で固め、騎馬隊がその間に混じっている。その盛大なる事は驚くべきことである。一バタイルロン《オランダ語Bataljon：歩兵・工兵の大隊》、騎馬隊一コンパクニー《オランダ語Compagnie：歩兵・騎兵の中隊》の編成と言う。道路の見物客、或る者は車馬に乗り、或る者は歩行で来て混雑すること幾千人なのか分からないほどであった。自分は此の時に、荷物の運搬を管理しており、行列の厳装を見ることが出来なかった。ホテルに着いて、他の人の伝聞を基にその様子を記載している。

ハムーロック港形勢《ハンプトンローズ：Hampton Roads》【バージニア州ポーツマス近くの港】

ハムーロック港はゼームス川《James River：リッチモンド付近を流れる川》がチェサピーク湾に注ぐ所にあり、幅２～３里あり、その西岸がハムーロークである。美しい屋敷が数十あり皆レンガで作られている。中央に長さ10間程の巨大な高楼が岸の側にあり、船中からこれが良く見える。避暑用の建物と言うことである。土地は平らで山は無い。海門は東北に面し、左右に岬が有る。右側が「ケープチャールズ」《Cape Charles：デラウェア州の半島の岬》と言い、左側を「ケープヘルレー」《Cape Henry：バージニアビーチの突端の岬》と言う。圧瀾海(あつらんかい)《Atlantic Ocean：大西洋》より入り、この両岬を過ぎると二つの川がある。一つはチェサピークと言い、幅30里、北から流れてくる。この川を100里程遡ると、又二つの川が有る。一つはチェサピークの本流で幅が30里、北から流れてくる。一つはワシントン市に通ずる川である。西北の方向から流れ、幅が広い所では10里、狭い所は３～４里【5.6km】で、川の長さは120里【192km】、川の名をポトマックと言う。水深が浅く巨船は通行が出来ないので、河用の小型蒸気船が往来している。自分達もこの小型蒸気船で行く。左右は土地が平坦で樹木が繁茂し、人家が有って畑が見える。もう一つの川は、ゼームス川である。この川の入口をウィチェニヤ(地名)と言う《バージニアのこと》。巨大な砲台がある。

六稜郭で周囲が１里程あり、その形は、 の様で、砲窓を二層に作り、下層はレンガ造りで砲室の奥行きが６～７間、壁の厚さが４～５尺、砲窓の暑さは３～４尺であり、隙間は全て石灰を塗って固めている。上層は胸壁【とりで】となっている。門外は防壁があって砲窓20個を備え、六稜の下層は前部に14窓、左右に６窓づつ、総計176窓が有る。その外に予備の砲が200門ある。砲弾は60ポンドから130ポンドまでで、六稜郭の周囲に堀を造り、深さ一丈で岸に皆石を積んでいる。郭内の中央に兵卒等の居住の部屋が有り、その側に火薬庫がある。その造りの精密さは驚くべきである。唯時間が無く、詳細を調べることが出来ないのが残念である。この場所から１里離れて川の中央に砲台を造ろうとしている。現在は建設中で、数十の船舶が寄集っており、建設諸材を運送している。東岸は茫洋として詳細は分からない。ここから少し遡ると水路が二つに分かれる。一つはゼームス川本流であり、もう一つは東から流れる。この川を遡ると、ノーホック《Norfork：ノーホーク》と言う所が有り大艦巨舶と言っても必ずこの場所に碇を下ろす。自分等が行って見る事は出来ない。この地の形勢を推察すると、多くの河川が湾に注ぐ所で、川の幅は海の様に広く、ワシントン市への距離は220里、水深は浅く大艦が通行することは出来ない。その喉元には必ず砲台を設置し、警

備は極めて厳重である。大敵・豪賊と言えども容易に乱入することは出来ない。ワシントンの遠謀はこの様な事で推し量られる。

フィラデルフィア船大略

フィラデルフィア船は河川用の蒸気船で、船の中央に天秤の様なものがあって、長さ一丈、高く船上に設置されている。蒸気の貫通に従って低くなってくる。左右の外輪がこれによって回転する。帆力は必要としない。器械は下層に設置している。長さ22～23間【41m】、幅４～５間【8m】で三層構造である。初層は雑庫と水夫の部屋となっている。二層は船尾に縦５～６間【10m】、横３～４間【6m】の食堂を設け、その一室に隔壁があり左右が部屋になっている。中央は蒸気器械の場所である。その左右は厨房になっている。厨房の内容は左右で異なっている。理髪はこの場所にある。船首には中央に大桶を置き、水や氷を貯蔵している。三層は、船尾の左右に部屋各15有り総計30個、便所は左右部屋の隅に有る。中央に蝋石製のテーブルが有り、他にビロードで飾った椅子が５、６個ある。部屋の外に縦５～６間、横３～４間の隔壁があり、御奉行等は皆此処に居る。又その次に左右に部屋が有る。一部屋に棚を設け、上下一人づつ寝る。左右に各22個、総計44個、右側は従臣用の部屋、左側は米国人の部屋である。ここの中央は蒸気機関の場所で、その前後に蝋石製のテーブルが有る。船首は舵を操縦する場所であり、大抵船は船尾で舵を操作するが、この船が船首で操作するのは、考えるに綱を通貫するためであろう。全ての部屋は、白石灰にて四面を塗り、金色をちりばめ、最後のところには必ず鏡台を立てて、且つシャンデリアを処々に設けて、席は美しい毛氈で出来ており、一つとして美しくないものは無い。飲食は全て米国の饗応で、酒五品、副食物が多くてその数は分からない。大抵鳥の類で、砂糖或いは氷を用い、数種の形をこしらえて出す。その豪勢さは人目を驚かすものである。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年閏3月25日(新暦5月15日)【閏3月26日】朝曇、午前8時頃晴。

滞留【ワシントン市】。戸外へ一歩も外出しない様、厳禁されている。米国人の男女、或いは車馬で或いは徒歩で日本人を見物しようとホテル【ウィラードホテル】に来て、混雑する。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年閏3月26日(新暦5月16日)【閏3月27日】晴。

滞留【ワシントン市】。今日も同じく米国人がホテルに来ること、ひっきりなしで、混雑する。他国の道具・食器を好むのは、何処の国でも同じで、今、米国

に来て見ると、子供に至るまで日本の道具・食器を好むことは金玉を見る様な心地で、一枚の紙と言っても貴重に扱うので、ましてや珍品に至っては言を待たない。自分の部屋は米国人の出入の場であるため、毎日数種類の道具を持ち込んで貿易しようとする。戯れに一枚の紙を投げると、米国人は争って拾いあう。甚だしい場合は、一枚の紙を得ようとして重器を持ち込む者が居る。笑ってしまうばかりである。
○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年閏3月27日(新暦5月17日)　【閏3月28日】晴。

滞留【ワシントン市】。午前０時頃、御奉行等初めて大統領宅《ホワイトハウス》を訪ねた。今日初めての会礼で、御奉行《新見正使、村垣副使》・御目付《小栗》は狩衣(かりぎぬ)を、二人の組頭《成瀬、森田》は布衣(ほい)を着用した。調役から徒目付までは素袍(すおう)を着、その他は皆熨斗目麻上下(のしめあさかみしも)を着用した。各人一車に乗る。御奉行には上等の士官が一人付き添う。組頭から徒目付までは下等の士官が一人付き添う。行列の順序は、外国奉行・組頭一車に乗り前列とする。それより新見使君・村垣使君の順序で列す。御奉行から徒目付までは一槍を建て、御奉行は徒士二人と近習・中小姓総計三人を附き従え、他の者は中小姓二人或いは一人を従えている。米国の警備は前に霜降り色の羅紗の服を着た者数十人が前列に並んだ。次に深紅色の羅紗を着た者数十人が音楽を演奏する。左右に小砲隊50～60人が一列に並び、二人の騎馬に乗った者が指揮をしている。他に歩兵総官が４～５人前後に居て、各々サーベルにて指揮をする。その警備は厳重である。道路には男女が雑踏していて、或る者は徒歩で、或る者は乗馬或いは乗車で、或いは建物の階上から写真機で光景を写そうとしている。その人数の多いことは幾千人であるか分からない程である。この光景は美観である。唯、御奉行等は定まった行装【旅の服装】を行うことが出来ず、各々軽装で行かざるを得ないのは遺憾である。帰路もこれと同じである。さて、大統領ビュカナン≪James Buchanan：15代大統領≫の居宅【ホワイトハウス】は、【日本人が宿泊している】ホテルから西北の方向で距離は７～８町【800m】、【玄関は】北に面して、前は一町程半円形に庭を作り、周囲を皆鉄柵で囲んでいる。左右に出入戸が有り、皆鉄製の一枚戸である。中央に玄関が有り、その入口に２～３段の階段が有り、これを10歩程進むと玄関内になる。前は横７～８間【14m】、縦(奥行)４～５間【8m】である。四面は白漆喰を塗り、その上に金色を散りばめている。席は皆花色の毛氈で出来ている。中央にシャンデリアが有り、その形はホテルの物と同じで、少し美しい。奥は左右に出入口が有り、ここを入り長さ10間、横３間程の廊下の横に有って、シャンデリア２個を設け、側に彫刻の人形(首より胸

半分まで)白く塗ったのを台の上に安置している。これはワシントンの像であるとの事。その側に三つの部屋が有り何れも金色を散りばめた木綿布の様なものを四壁に張り、ビロードで飾り立てた椅子５～６脚を設置し、中央にはテーブル上に花が活けてある。御奉行等は中の部屋に、属官はその右の部屋に居る。この廊下の左に大広間(ここは玄関の側に当たる)が有り、その装飾は非常に美しい。ここは今日の応接の場として使われる。又、玄関の右側に縦に廊下が有り、ここから内側の部屋に入る様になっている。廊下の入口には、正面に金色に塗った鉄製の鷲を、木製の鹿の頭部の上に設置している。この配置は奇妙である。建物の高さは４～５階建てで、何れも美しく、人目を引き付けるものである。唯建物の造りは日本と異なり、皆レンガを積み、その広狭に従って高さ一間【1.8m】、横５～６尺【1.7m】のガラス窓一個或いは２個を設置する。その形は、方形であったり長方形であったりする。且つ、白漆喰の上に金色を散りばめ、日本の寺院の様で、それ以上の風雅の趣きは無い。尤もプレジデントの邸宅ではあるが、城郭を用いておらず、通常の家と同様である。唯、海岸の要地に砲台を設置し、この場所を堅固にしている。米国は共和制であり、個人一人の独断専行をすることは出来ない。善悪吉凶は皆国民と同じであり、内乱は決して起きないようにしている。故に国内を守ることは大まかにして、主として外国からの侵略を防ごうとしている。さて、本日の応接は非常に簡単で、始め御奉行等は各自の部屋に居たが、暫らくして米国側から案内の者が来て応接所に案内した。大統領達は互いに一礼して退席した、それから１時間程して又米国側から案内の者が来て再び応接所に案内した。大統領は威張らず、衣服は黒の羅紗で格別の装飾は無く、出入の時も先払い(警蹕：けいひつ)はせず普通の人と同じである。着座に関しては関係者は勿論、婦女子と言えども正装して左右に並び、男女の区別は無い。始めお互いに合うときは各々脱帽して握手し、その後談話が始まる。その応接は自分達が居た場所の横であり、少し首を伸ばせば全部が見える。国民は戸外に立って見学しているが、誰も規制はしていない。それは親戚や官吏が個人の資格で面会する場合の礼と同じである。２時間程して各人部屋に戻る。その他、国務長官宅に行ったときも同様の持て成しであった。婦人が傍らに居るのみならず、互いに手を握り合って心を通じ合うという事である。午後御奉行等は帰館された。午後２時過ぎ、議事堂及び国務長官、財務長官、海軍長官、郵政長官、内務長官、駐米イギリス公使の私宅へ行き、門外で一礼挨拶のみにて帰られた。その他に、駐米フランス公使、駐米オランダ公使には、小時間応対があった。午後４時頃帰館された。その際に付き添った従臣の内の一人が極めて軽装で、車馬に乗っていた。

〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年閏3月28日(新暦5月18日)　【閏3月29日】曇。

滞留【ワシントン市】。午後２時頃御奉行等、ロシア、イギリス公使の私宅に行った。ロシア公使宅では、酒菓が出されて饗応され、付き添った従臣に至るまで丁寧に持て成された。イギリス公使宅では公使が不在との事であった。帰館後、大統領への進物をどの様にするか検討していたが、接伴委員長《Captain S.F. Du Pont》の依頼で、残らず写真に写すことにした。夜８時頃、国務長官宅に招待され、酒・肴が出され、且つ数百人の美女が舞を舞って大いに座を盛り上げた。その饗応は非常に盛大なものであった。《国務長官カスの官邸の夕食会に招待されたが、そのあと大舞踏会が催された。村垣使節がダンスを見て「夢か現か」云々という感想をもらしたのはこの時のことである》　夜10時頃、帰館された。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年閏3月29日(新暦5月19日)　【閏3月30日】曇、時々小雨。

滞留【ワシントン市】。午前10時頃、ロシア公使がホテルに来る。正午頃ホテルから南東の方向に２町の所で火災があった。始め半鐘を打ち鳴らして人を集めた。ところが日本と異なり、道路に群集が群がることなく、たとへ隣家と言っても火災を気にせず、読書をしたり或いは談笑して悠々としている。唯、消防士が龍吐水《人力消火ポンプ》或いはポンプ(水揚げの道具)を携えて走るのみである。これは米国の家がレンガ造りで高さが二階建から七階、八階建になり、出火すれば家中の木材のみが消滅するだけで、他家には類焼しない。唯、高層なのでややもすれば人身を失うことがある。このため、専ら出火時は逃げる事を主として居る。後日、紙に書いて各港に広告している。交通の要所や繁華街には失火札を張って広範に情報を広めている。これは米国の法律に基づいたものであろう。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年閏3月30日(新暦5月20日)　【4月01日】晴。

滞留【ワシントン市】。今日はソンテー(日曜である)、街中では何れも商売を停止し、この日にはキリスト教の説教の類を聞きに行くと言う事である。午後、従臣の各々が市内見学を許可され、小人目付一人、普請役一人、定役一人の都合三人、他に黒人二人を付き添えて始め西北の方向に出た。一町程行った所に巨大な家が有り、長さ一町、横半町程で皆レンガ造りである。周囲に円径が３～４尺【1m】の石柱を用い、四面が白亜で種々の色彩の飾りを散りばめている。ここは国務長官の居宅との事である。御奉行等が事情あるときはこの居宅に行き、そのことを相談する。ここから左折して二町程行き、大統領の家の前に出る。その右側に周囲７～８町【約750m】の庭園があり、全て細草或いは小木を植えている。

中央に高さ７～８尺【約2m】の石壇を設置し、その上に今にも飛び跳ねようとして両足を挙げた血気盛んな馬に一剣を下げた米国人が跨っている銅像が有る。これはチョキソン将軍《General Jackson：第七代大統領ジャックソン》の像である。昔英国と戦争になったとき戦巧を立て、現在でも国民に尊敬されていると言うことである。見終わり、西南の方向に５～６町【約650m】程行き、左右に大きな建物が軒を連ねているけれども、道路は人通りが少なく寂々としている。ここは商家ではなく、士官の家であろう。ここから屈曲数町を行き左折すると、広い土地が有る。周囲に鉄策を巡らして、中に大きな家がある。その側に小道があり、ここを３町程行くと川があり、それに沿って平坦な土地がある。そこに細草が繁茂しており、側に屋根の無い小屋がある。周囲は三間程でその中に長椅子が三方に有り、石塔に似た入口が２～３個有る。これは休息所である。眺望は非常に良く、ワシントン市の形勢が一望できる。２時間程休憩してそこを去る。そこから前に来た道を戻り、右折して６～７町行くと、又庭園がある。造りは前のものと同じで、中央に石壇が有りその上に並足の馬に跨った一剣を帯びた人の像がある。これはワシントンの像と言う。凄く勇壮に作られている。ここから帰館の道になり、屈曲15～16町【約1500m】でホテルに着く。時は午後４時頃である。今日は初めての遊歩なので、厳命があって一歩も他に行くことが出来ず、米国人の道案内に従うのみであった。繁華街に行くことを禁止したと見えて、人の余り来ない場所を選んで道案内したと思われる。日本人は皆不平を言ったが、どう仕様も無い。一方で、米国人は我々日本人を見ようと群がり集り、道路が混雑し、お互いに親愛になりたいと握手を求めてきた。又、父母は３～４歳になる子供を連れて、握手･接吻を願って左右を離れない。その情の厚いことは斯くの如きであった。夜、ホテルの別室（前に説教の場所と記述した所）にて、ヲウーゲン≪オルガン≫を演奏し、御奉行に聞かせた。このとき、従臣も列席することを許された。その音色は少し聞くに物足りないものであった。

○寒暖計不試

旧暦万延元（1860）年4月01日（新暦5月21日）　【4月02日】晴、午後４時頃雷。

滞留【ワシントン市】。午前10時頃、御奉行等パテントオフュシ（博物所と言う所）《Patent Office：特許局》に行く。ホテル【ウィラードホテル】から東に向って８～９町程の所で右折し、１～２町行けばその所である。大きな建物であり、高さ５～６建てである。最初、二階に行って暫らく休憩した。それから三階に上れば、左右前後に棚を数段重ね、そこに禽獣魚虫の剥製を並べている。その形は生きた動物の様である。その他に、万国の道具を陳列している。その数は多く、幾万になるか分からない。日本の道具も陳列してある。それは先年、ペリーが日

本から持ち返った物であった。御殿女中の衣服、草鞋(わらじ)、煙管の類、二三点が有った。その部屋を過ぎ、別の部屋に入れば、器械の模型が有り、これまたその数がどの位有るのか分からない。そのため、一つの器械の詳細を聞こうとすると全品を見ることが出来なくなってしまう。全品を見ようとすれば、一つ一つがどの様な器械であるのかを聞くことが出来なくなってしまう。唯、茫然として目が引きつけられる。且つ、米国人男女の見物人で雑踏し、自分達が一つの器械に興味を持つと、米国人が左右前後に群がって猥雑を極め、しばしも足を止めることが出来なくなる。器械を見ようとして、逆に【自分達が】米国人の見世物となってしまう。自分が休息しようとして椅子に腰を掛けたところ、前面に米国人数十人が立ち並び、その内の13～14歳の子供が二人来た。双子と見えて、顔形が良く似ていて、どちらが兄でどちらが弟か分からない。言葉が通じないけれども、自分と相通じ、互いに手を握って親しくなった。その母親と思える人が側に居て、談話したが何を話しているのか理解するのが出来なかった。後で考えてみるに、双子の両人が大きくなったら日本へ派遣し、長く親善したいと丁寧に頼んできたのではないかと思う。その心情の厚いことは自分の袖を濡らすほどである。その他、米国の民衆男女が、【我々日本人と】握手したいと争って来た。我々の一手に米国人の三本の手が握手しようとしている状態であった。正午頃ホテルに帰館する。午後４時頃、空が一天かき曇り、雷鳴轟々と鳴り響き、大風雨となる。しばらくして快晴となる。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月02日(新暦5月22日)　【4月03日】晴。

滞留【ワシントン市】。午前10時頃、御奉行が大統領の居宅へ行き、日米修好通商条約に押印した。陪臣及び従臣は中扈従【ちゅうこしょう】一人のみであった。午後帰館。午後２時頃、御奉行が駐米オランダ公使の私邸に行ったところ、美酒・美菓を出され、殊に美女を集めて舞踏会が催された。その饗応は盛大で、筆舌に尽くし難いものであったと言う。午後４時頃帰館された。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月03日(新暦5月23日)　【4月04日】晴。

滞留【ワシントン市】。午前10時頃、御奉行等が議事堂に行く。自分は陪扈を許可されなかった。午後帰館された。夜、ホテルの別室にて舞踏会を開催して饗応した。自分達従臣もその場に居ることを許された。その舞踏の内容は【ハワイの】サンドウィッチ島でのものと同じ様なものであったが、唯、バイレール《バイオリン》と言うもの(以前に記した)を弾いた。音楽を演奏せず、奏者は全員、

入口の二階に居た。踊り子は一階に居り、その数が多くて何人居るか分からない。彼女等は全員美装して、衣服は腰輪を用い、数種類の模様を縫い取り、首には造花を飾って、男女十六組、互いに手を取って円舞して踊っていた。或る時には少女が一人で踊り、終わりに男女が互いに組となって随意に踊る。その舞踏の内容は、日本と雲泥の差がある。どの様な音楽なのか理解することは出来ないけれども、何れも美顔白玉の様で、それに美装であるがためである。その容色は何に喩えたら良いのであろうか形容の言葉も見つからず、【日本人の】誰一人として驚かなかったものは居ない。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月04日(新暦5月24日)　【4月05日】晴。

滞留【ワシントン市】。午前10時頃、御奉行が国務長官の所に行き、午後帰館された。午後２時頃、海軍造船所に行かれたが、自分は陪扈を許可されなかった。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月05日(新暦5月25日)　【4月06日】晴。

滞留【ワシントン市】。午後４時頃、御奉行等、大統領の居宅を訪問した。酒宴の饗応があった。陪従の者まで饗応され盛大であったとの事である。午後６時頃帰館された。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月06日(新暦5月26日)　【4月07日】晴、午後２時頃雷雨。

滞留【ワシントン市】。午後、遊歩を許可された。ホテルから東に３～４町程行き、右折して２町程行くと橋がある。長さ20間、横２間で、柱・桁・梁及びその他の欄干は皆鉄で出来ている。木材を用いている所は桁上の人の往来する所に用いているだけである。欄干には小さな鉄棒を左右に渡し、半円の形にして低くし、身長の高い人は身をかがめて通るようにしている。これは、橋を車馬が通行出来ないようにするためである。ここを過ぎて10歩程行くと、鉄柵を設けた広い土地がある。その入口は幅１間で中央に柱を２本建て、その上に十字の小木を水平に置き、その間を通過すると先程の十字が回転して、一人が通過できる。これは又車馬の往行を許さないためであろう。此処を過ぎ、半町程で巨大な家が有る。４～５階建てで、その名をスメフリウネンインシラーチュート《スミソニアン・インスティチュート》と言う。始め２階に行ったが、【キリスト教の】説教の場所で、正面の高い所に木壇を置き、その前に数百の椅子がある。その側に一部屋があり、人形を描き、四面に掛けてある。中央に裸体で陰部を木の葉で隠した木刻

の人形が飾ってある。これはワシントン市開闢(かいびゃく)以前の人物であるとの事である。此処を見終わり、また別の部屋に行く。文房具が具備され、正面に一つの写真の像がある。昔、此の家に居住した人で、その形を今に残すためのものとの事である。又左の別の部屋を見る。ここには地球及び珍しい品を陳列している。側に大鏡があり、その陰に入ると形が10倍に拡大して見える。不思議である。１階に行くと、数十の高架が有り、珍しい鳥や獣及び万国の道具が陳列されている。日本の道具で、太刀・長刀・槍・煙管・漆器・呉服等数十の品物が有る。特許局に比べれば、日本の道具の展示数は多い。その側に四～五体の老少の人間の骸骨がある。これを見れば、思わず怖さを感じてしまう。又、獣皮で作った人形があり、高さ６～７尺である。これは昔、米国人の医師が寒い所に行った時に着た着物であると言う。この他、数多くの品物があり、どれも人目を驚かすものである。帰途、空が真っ暗になり雷光が走る。午後４時頃の事である。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月07日(新暦5月27日)　【4月08日】晴、午後４時頃小雨。

滞留【ワシントン市】。今日は日曜日で、市中の商売が停止する。
〇寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月08日(新暦5月28日)　【4月09日】晴。

滞留【ワシントン市】。午前10時頃、一同連れ立って写真屋に行く。その遣り方は凡そサンドウィッチ島と同じである。行った全員が写真を写した。その間、約４時間ほどである。自分は他の人の紋服を着ていたので、再度撮ってくれることを依頼して帰った。午後ホテル【ウィラードホテル】から東南に一里【1.6km】程離れた所にある海軍造船所に行った。３町四方の広い場所で、門の内外に各一人の兵卒を置き警護している。その側に米国の国旗を高く掲げている。この場所の後は川になっており、運送に便利である。製造所内に、長さが50～60間、幅10間の家が７～８軒、縦横にあり、その内容は異なっている。その他に官吏の住居が７～８軒ある。その製造を見ると何れも蒸気機関を利用した精巧な器械で、人力を必要としていない。百人程掛かる仕事を１人か２人でこなす。その精密なメカニズムは一見して容易には理解できない。ここに一、二例を示して説明する。鉛丸を作っているのをみると、丸い鉛の棒を順次に鉄製の金型で上下から打込んで固める。(正面) (側面) この様な過程で円丸に成型する。又、これを

一個ずつバラバラにする道具も有って、僅かの時間の間に数百の鉛丸を作る。又、爆帽(ドンドルクハン)《オランダ語：Donder Kaper、雷管》を作るのを見ると、雷須粉(ドントル：)を粘るまで一つの器械で作成する。その他、激発丸の鋳造、木材の加工は全て蒸気の力で行っている。又、大きな鉄を伸縮するのに百人力を要するのに、一、二人のみで自在に出来る。蒸気機関の便利さはこの様なものであり、その国を富裕にするものである。午後４時頃、御奉行等が天文台に行く。夜午後８時頃、帰館される。午後10時頃、ホテルの近辺で失火があり、半鐘をしきりに打ち鳴らしている。暫らくして鎮火する。
〇寒暖計不試

【巻三　　終】